

---

# 短編集

ピエロ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

短編集

### 【Nコード】

N44710

### 【作者名】

ピエロ

### 【あらすじ】

基本的にこれは！　って思ったものをネタに衝動書きしていきます。

どうか最後まで付き合ってください。

## 奇跡（前書き）

奇跡についての記述を発見したので、書いてみる事にしました。

こんな奇跡、あなたは信じますか？

## 奇跡

今僕の目の前には死体がある。

死体の元の名前は、九里里泉奈<sup>くりざと せんな</sup>。どこにでもいる大学生であり、

僕の……恋人だ。

「泉奈……泉奈あ！」

僕は泣いた。

泣いてどうにかなるなんて思いもしなかったが、悲しまないでやり過ぎす事なんて出来る訳もなかったから。

もしも僕に力があれば……とそう思わずにはいられない。そうすれば僕はきつと、何が何でも泉奈を生き返らせようとするだろう。例えこの身が滅びようとも……。

でも。

でもそれは都合の良い『もしもの話』。そんな事、起こりっこ無いことは僕自身が理解している。

彼女は何も言ってくれない、いつものようにこんな泣き虫の僕を抱き締めて慰めてはくれない、きつと永遠に有り得ない。

僕は彼女のもとを離れた。近くにはいれなかった。近くにいて自分を保ち続ける事が出来ないと思ったから、離れた。

泣かないで、あなたには私が付いているでしょ？

いつも掛けられていた言葉が頭の中で壊れたレコードのように再生される。

僕は歩いた。どこに行くのか、どこまで行くのか、そんな事は分からなかったが、歩かないといけないと思った。別に強制力が働いていた訳じゃない、逃げようと思えば逃げる事も可能だった筈だ。ただど逃げたくなてなかった。

僕は歩いた。歩いて歩いて、ただひたすらにどこまでも歩き続けた。

そして。

この場所に辿り着いた。

辺り一面には金色の草原がまるで大海のように広がり、空一面を金色の玉が埋め尽くしていた。

そして世界の中心には一本の巨大な樹が、天空を槍のように突いている。よく見ると光の玉はその樹で一休みしているようだった。

僕はそのあまりの美しさに何も出来ず、ただ涙するしかなかった。声が嗚咽となって漏れ出るが気にしない、足は今まで歩き続けたツケを払わされガクガクと痙攣している。

もう限界だった。

僕はもう、泉奈の死を受け入れてしまったみたいだ。それは酷く簡単であつた事のように思える、でもそれを納得だけはしたくなかった、絶対に。

「泉奈……」

口から愛したたつた一人の女性の名前が漏れ出る。

樹がざわざわと揺れる。

—— 汝、我ニ何ヲ望ムカ。

不意にそんな神々しい声が聞こえた。

僕は驚きに顔を上げ、目の前の巨大な樹を呆然と見上げた。

—— 汝、我ニ何ヲ望ムカ。

また響いた声に僕は答える。

「泉奈…… 泉奈の……」

言ってしまうば僕はきつと彼女の死を受け入れた事になる。

だけと言わないと。言わないと僕はきつと、彼女に甘え続ける事になる。

「泉奈のところに戻してください」

彼女をずっと見ていたいから。

—— 聞キ届ケタ。 汝ガ願イヲ受け入レヨウ。

巨大樹が、草原が、光が—— 僕を包み込む。

そして意識が離れる手前、僕は、

泣かないで、という声を聞いた気がした。

目を開けると、そこには彼女の死体が在った。

僕はそれを見て涙し、そして動かない体に鞭を打ち立ち上がる。

「電話しないと……せめてもう少し安らかな場所で死んで欲しいから……」

景色に霧がかかり、瞳に湖が現れ、頬を川が流れ、顎の先から大雨が発生しているが気にしない。

僕はもう強くなったんだ、だから、こんな嘘に騙されない。

「泣かないで、あなたには私が付いているでしょ？」

霧の切れ目から僅かな太陽が覗いた。

「泣いて、ないよ……泉奈の、お陰で、僕は強く、なったん、だから」

「知ってるよ、あなたが強かった事なんでもとから知ってる」

雨は降り止み、川が蒸発、霧はこうこうと照りつける太陽によって弾き飛ばされていた。

僕は後ろを向いた。

「泉奈……泉奈あ！」

今度は嬉しくて彼女の名前を呼んだ。

僕はもう絶対泉奈を離さない。

彼女はそんな僕を優しく抱き止めてくれた。

彼女の腕の中からは樹の優しい匂いがした。

「もう泣かないよ、これからずっと、僕には泉奈がついてるから」

< 完 >

## 奇跡（後書き）

そんなにばんばん奇跡が起こるわけがないという否定の文章でしたが、これくらいのはせばどうでしょう？

ちなみに自分は奇跡というものを信じています。

信じる人には、信じる人の奇跡が起こるだろうと、願っていますから。

## 人形（前書き）

人形のお話。

楽しんでいただければ幸いです。

## 人形

見えますか、あそこにある人形を。

見えますか、あそこにある人型を。

見えますか、あそこにある■■を。

そこは真つ暗で何もない世界。暗く暗くどこまでも無明の闇が続く世界。

その果てには何があるのかわかりません、きっとここより深く思いう漆黒の無があることでしょう。

人形は夜風を浴びて髪を靡かせます。そこには人形しかありません。

人形は喋る事が出来ません。人形は喋る事が赦されません。人形は動く事も赦されません。人形はただ動いています。

人形は御堂に入りました。闇が巣くうその場所に、人形が開け放った扉から氷のような風が入り込んできます。人形はその冷たさを気に止めたが、人形は冷たかったので閉めました。

人形には感情はありません。人形はそれが悲しかった。誰とも感情を分かち合う事が出来ないのですから。寂しかったのです。

人形がこの場所に来てから数百年という歴史が流れました。人形はここに来てから人に合った事が有りません。もうどんな姿であつたかも覚えていません。人形はそれが悲しい。

人形はご飯を作りました。お腹が減ったのでした。ご飯が出来上がりました。

人形はご飯を食卓に並べました。そしてしばらく闇を見続けました。

闇から帰ると、ご飯は食べられていました。しかたなく人形はそれを食堂に持っていき片付けます。それは嬉しい事だったから鼻歌も混じっています。よく見ると、残っていた分の食事も全て平らげられています。仕方ないので食事を作った調理器具を全て洗う事に

しました。だって人形は嬉しかったのですから。

片づけを終えると、人形を見つめます。

人形は人形を見つめます。

やがて人形は人形になりました。

感覚なんてありません。感情なんてありません。何もかもが空っぽで、まるで底なしの闇であるかのような人形がいました。人形は嬉しく思いました。人形にこれ以上嬉しい事はなかったのです。

人形は無感動に人形を見つめました。人形は嬉々とした目で見つめ返しました。

人形は足早に去っていきました。振り返る事なんてあるはずもありませんでした。

人形は悲しかった。しかしやはり嬉しかった。

だから目を閉じました。

次に目を開けると、人形は感情を喪失っていました。人形は嬉々とした目で人形をみつめていました。

< 完 >

## 世界（前書き）

今回はすこし微妙かもしれませんが。  
どうか楽しんでください。

## 世界

無数の人間が蔓延る場。世界は全てを容認する。

正義がある、悪がある、正義を悪が討ち、悪が正義を蹂躪する。

世界は容認する。

人が生まれる、人が死ぬ。世界はそれを容認する。

何もかもがある、何もかもがない。世界はそれを容認する。

そこにあるものが何であろうとかまうことはない。

ただ容認するだけなのだ、世界というものは。

故に背反の事象が存在し、拒絶という言葉が散乱する。

世界はブラックホールのような、何もかもを飲み込んでいく。

言い得て妙なこの比喻、どう感じる事があるうか。その意味を考えよう。

世界は全てを容認する。世界は全てを受け入れる。世界は受け入れたものを離さない。

一度世界に取り込まれてしまえば待つのは永遠という時間と、摂理という名の不条理。逃れられる術など有るはずがない。世界は全てを、拒絶も逃避も隔離も閉鎖も、容認する。

世界は容認する。故に世界は一度容認した物の全ての意志を容認しない。

絶対とは世界、世界とは絶対。二つの事柄は常に同じ地平にある。未来永劫、いや、世界創誕から世界終焉にかけてまで離反することはない。そう、将に絶対に。

あなたは生きていと言い切る事が出来ますか？ それは何故ですか？

もし知っているなら、きっとあなたは、苦しんでいる。

苦しんでいるからこそ、楽しんでいる。

きっと、それが全てだ。

そう、信じる。

<完>

## 君を愛す（前書き）

趣向を変えて、短編を集める事にしました。

## 君を愛す

きつと君は僕の事を覚えていない。

それでも、いい。

僕が君を守る事に、なんの変わりもないのだから。

僕は、人を、殺す。

君の、為に、殺す。

だから、——君は、僕を、殺せ。

深い深い深い、暗い暗い暗い。

バージバル・アークライト一行はとうとう終焉の地にまで到達した。

そこは地獄だ。生物の存在を拒むようにマグマが周囲を囲み、あらゆる存在がここで果てたかのように腐臭が漂っている。

一行は足を止めた、止めざるを得なかった。

「ようやく来たんだ……、待ちに待った日は今日だったんだね」

地獄の入口、一行にとっても見慣れた人物が入口の脇に座って一行の事を見ていた。

「アストラリア・ガーゴイル……」

「おや、僕の名前を覚えてくださったんですか？ それは嬉しい。握手でもしますか？」

立ち上がったアストラリアに気圧されて一行は一步後ろに下がる。ただ一人、バージバルを除いて。

「忘れるわけないでしょ……」

何度となくバージバル一行の前に立ちふさがった男、アラストリ

ア。全世界にたった五人しかいない千億越えの賞金首であり、世界一悪行が轟いている男でもある。

そして、一行のリーダー、バージバル・アークライトから全てを奪った男でもある。

「あんたが……、あんたが家族を！」

「……仕方なかったんですよ」

「うるさい！」

バージバルは剣を抜く。続くように一行は全員剣を抜く。

数にして五。一人で戦うには少し多すぎる気もするが、それでもアラストリアは剣を抜いた。

それだけ。

それだけの行為にも関わらず、二人气絶した。

「伝説の勇者の一行がこの程度ですか……、まったく、よくここまで来ることができましたね」

「くそつ、お前だけは、お前だけは！」

バージバルがアラストリアに向けて駆ける。

一直線に駆けながら剣先はアラストリアに向けている。

半身になってかわしたアラストリアはバージバルに剣を振るう。

しかし剣は剣で弾かれ、更には剣が増える。

「やっぱり駄目です。僕は君としか戦いたくない」

瞬間、一行の残りの二人が、ひれ伏した。

より正確に言うなら、アラストリアが二人を地面に一瞬で叩きつけた。

二人は動かない。

「これでようやく二人だね」

「ふざけるなよ！」

再び剣を振るうバージバル。

剣は空を切り、顔に手が当たられ、そのまま——地面に叩きつける。

剣はどこかへいき、バージバルの上には手を顔に置いたままの上

に乗っかかっているアラストリアがいる。

「女の子が、特に君はそんな汚い言葉を使っではいけませんよ」

「くそっ！ のけ！ のけ！ 死ね！」

なおも逃れようとするバージバルをやれやれと眺め、

「……………少し、昔話、しましよう」

ようやくぼつりと呟いた言葉は、どこか懺悔のようにも聞こえた。

金持ちの家がありました。

その当主はあまりある莫大な資金を使って何をしたか。

当主は金で、命を買った。自分のじゃない、他人の、だ。

結果は、その命を使つての、戦争、——ごっこ。

本気でする気もなく、ただ遊びの為に命を使い、弄んだ。

「それ自体は悪いとは言い切りませんが、むしろ僕としては共感を覚えます」

「っ！ 外道が！」

いつしかごっこは、遊びでは無くなり始めました。

その金持ちはあまりに命を弄び過ぎたのです。

だからあらゆる国から暗殺者や軍隊、陰から陽いつでも狙われましたが、金持ちは死にません。

すべて金で解決し、すべて金で丸め込んだのです。

「清々しい人でしたよ」

「うるさい！」

でも、当主にも手が出せないものがありました。

それは娘、たった一人だけの娘です。

両親さえ、妻さえ、使用人さえ使って遊び続けた当主は、それでも娘だけは手が出せなかった。

「いい話ですね」

「黙れ！」

だけど、娘は、当主に反抗した。

当主はそれでも娘を使う事はなかった。

そして、ある時、悲劇は起こった。

金の為ではない、己の欲望の為に人を殺す狂人が当主を殺したのです。

「ちなみに僕の事ですょ」

「死ね！」

下で暴れるバージバルを眺め、空を向いて一瞬、悲しそうな顔をする。

当主は死ぬ間際、狂人に言いました。

娘を頼む、と。

頼んでも聞き届けられないと知りながら、それでも頼まずにはいられなかった。

自分が死んだ後、娘がどのような待遇を受けることになるか、想像は出来ていたのでしよう。

「僕は、断る、と言いましたが」

「くそ！ のけ！」

希代の殺戮者、ガルガルド・アークライト。

彼に対する恨みは消える事はない、けれどその恨みの矛先を向ける相手は、……いたんです。

その娘、バージバル・アークライト。

可憐で美しい少女、絶世の美女とまで噂された、箱入り娘を、彼



これでいい、とアラストリアは呟いた。

包んだ光は納まり、代わりにバージバルがほのかに光っている。  
アラストリアは飛び退き、二三跳躍するように後退して間合いを取る。

「何ですか、その力は」

「知らない。けど、力が湧いてくる！　これならお前を！」  
剣を振るう。すると剣から斬撃のように光が飛び出した。  
アラストリアは光の斬撃を左手で受け取る。彼ならかわすこともできていただろうに、しなかった。

左手が、切り裂かれ、五指と二頭筋の半分が地面に落ちる。  
その威力、推して知るべし。

「大した威力です」

「は、ははははは！　何だその様は！　はははははは！！」  
何かの枷が外れたのか、狂ったようにバージバルは笑う。  
その姿を視界の端に納め、アラストリアは右手に持った剣で、  
左肩以下を斬り落とした。

その狂った行動には狂ったバージバルでさえ言葉を呑む。  
しかしアラストリアは変わらぬ調子で、血を滝のように流しながら言う。

「大丈夫です。ここはそういう場所ですから」  
血は既に止まり、腕こそは再生しないがすでに斬られた断面はない。

「お、お前……！」

「どうしたんですか、まさかこの程度でひよったんですか？」  
口の端を吊り上げ、狂ったように笑う。

バージバルは気圧されて後退した。

アレニハカテナイ、ニゲナイト、シヌ。頭の中でその言葉が乱れ飛ぶ。

「……僕を怖いと思いますか？」

「ッ！ 誰がそんなこと！」

「では、僕を殺したいと思いますか？」

「当たり前だ！」

「それは何のためですか？」

「お前が家族を！ お前がお父さんを！！」

「では」とアラストリアは最後に笑いながら、「よかった」

バージバルにはアラストリアの言葉の意味が理解できなかった。

良かったという言葉の意味は理解できても、その言葉を今ここで使った事に対して理解が追い付かない。

「それはあなたの意志です」

だから、

「その意志のままに、——僕を殺せ」

両手を広げる。まるで受け止めるとでも言うように。

バージバルは分からなかったが、その絶好のチャンスを逃す事はせず、剣を、アラストリアの胸に突き立てた。

剣は、胸の皮脂を抜け、肋骨を割り、心臓を貫いて、背中から突き出た。

即死は間違いない。

アラストリアは胸を突かれたまま、そのまま剣を持ったバージバルに、世間を知らぬ少女に近づいた。

深く、より深く剣が刺さる事をいとわず進む。

そして、最強の悪魔と言われるのとは正反対で天使のように少女を抱きしめた。

「実はね、僕はその当主に頼まれたことは聞かなかったんだけど、それでも楽しく殺そうと思って君を見た」

そして、

「心を奪われた」

「……………え？」

「僕はその成長を見たかった。どんな人生になるのか興味がでた。だから、——君に毒牙をかける全ての人間を僕は僕の楽しみを奪う敵と見なして殺した」

それは……、

「国崩し、お家崩し、大量殺人、僕が犯してきた全て」

「待つて、それ以上は」

「君の為」

ギョツと強く、離さないように強く、大切なもののように優しく、抱きしめる。

そして離して、終焉の地から離すように突き飛ばした。

「僕が行こう。君が行くよりは良い」

「けどそれは私が頼まれ！」

「頼んだ人間は死んだ、もう必要ない」

何かを言おうとしたバージバルを手で制し、体を返す。終焉の地へ向けて。

「君はそれでも行くと言うでしょう、だから僕が片付けてきます」

「待つて！」

「待ちませんよ。知っているでしょう？　僕は君の家族を殺した人間だよ？」

トンツと首を何かで叩かれた。

そ、んな……、距離はあったのに……。

そう思うが最後、バージバルの意識は暗闇に沈んだ。

「さて、光は託したので、僕にはもうあんまり力は残されていない

「ついでに」

アラストリアは、最凶の悪魔は、命の灯火が消えていくのを感じていた。

「なら最後ですね」

笑う。 楽しそうに笑う。 愉しそうに笑う。 愉しそうに嗤う。

嗤って嗤って、喜悅が顔をより悪し様になる。

「く、く、……くはっ、くははははははは！」

声が響く。悪魔のような心を不安にさせる笑い。

「ははははははは——ふう、さて」

進む。悪魔は進む。

終焉の地へ進む。地獄のような場所へ進む。

もう、  
帰れないと知りながら。

## 血霞

花びらが一枚二枚三枚四枚五枚と舞い落ちる。花びらは樹が血を吹いているように紅く、血の水たまりを木陰に作っていた。

血はやがて固まるだろう。しかしこの血は固まらない。風がある限り撒き散らす。

ここはどこだ。

少女は思案した。血に塗れた景色は明らかに少女に残酷なイメージを植え付け。否、植え付けるでは生易しい、それでは主体が変わってしまう。故に、景色は少女に血のイメージを脅迫し、それ以上は何もしない。

赤い。少女は血がヒラリと舞う景色を見る。

紅い。少女は血がユラリと揺れる地面を踏む。

朱い。少女は血がダラリと垂れる両手を握る。

おかしくなる気はしなかった。強靱な精神故か、はたまた既におかしくなっているからなのか、少女には分からなかったが、そういう気だけは分かった。

血は少女の目に張り付いた。拭うと世界は朱に変わる。朱い世界。少女が成した世界。少女の世界は崩壊していた。しかし世界はまだある矛盾、少女は世界にしながら世界から離れて立っている。

少女に分かるのは景色の色が朱ということ。そして、ふつうではないということ。

少女は愉快を装い笑った。

自分は世界にいないのだから、何をしても世界に当てはまらない。そう思ったから。

血が舞う。これから行われる残忍な舞踊に酔うように、はたまた少女の嗜好に華を添えるように。

少女はドロリとした両手の朱を舐めとった。張り付いた笑みは哀しみの笑みか嗜虐の笑みか、少女ですら分からない。

少女の感情は閉ざされ、捻りくねった幻影が感情を作り出して  
る。

笑う。赤を咲かせるため。

笑う。紅に埋もれるため。

笑う。朱を愉しめため。

笑う。色を失っても。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4471o/>

---

短編集

2011年5月7日17時26分発行